

高等学校における異文化理解学習（2）

—日本統治時代の朝鮮を事例として—

地歴・公民科 高橋 健 司

1 はじめに

本校2年次生は、平成8年度より韓国への校外学習を実施している。それは単に名所旧跡の見学だけにとどまらず、韓国の高校生との交流にも力を入れている。それゆえ現代社会の授業において、異文化理解学習に重点を置くようになった。

本校の生徒にとって、「異文化理解学習」とは、小学校や中学校での学習を通して「知らない国の文化を理解すること」というのが定着している。しかし、その一方で実際に異文化と出会ったときにどのように接すればいいのか、という「異文化の接し方」に対する知識・経験は乏しい。そこで異文化の内容的な理解に加えて、態度育成を目標とした授業に取り組むことになった。

その際、特に留意したのがエスノセントリズム（自民族中心主義）の問題である。これは植民地支配の時代に顕著に見られ、未だに克服できない「朝鮮蔑視」の源になっている。こうした態度や見方は、我々の自尊心をくすぐり、根拠のない優越感を植え付けようとする。これは現在、世界的な課題となっている「多様な文化との共存」に逆行するものである。

このような観点から、エスノセントリズムをいかに克服するかを、異文化理解学習の目標とするに至った。

2 教材について

そこで授業のための教材として注目したのが、浅川巧と柳宗悦という二人の人物である。

柳宗悦は「民芸の父」として知られ、大正末期から戦前にかけて民芸運動の中心となった人物である。彼はそれまで顧みられることのなかった、民衆の生活にかかわる工芸品に美しさを発見し、それを「民芸」と名付けて普及させようとしたことで有名である。

これに対し、浅川巧は朝鮮総督府の林業試験場に勤めていた一介の技師で、これまであまり知られることがなかった人物であるが、近年になって柳宗悦に大きな影響を与えた人物として注目されるようになった。すなわち浅川巧を通して朝鮮の工芸品の美に開眼した柳宗悦が、やがて日本各地に残る工芸品にも目を向けるようになったといえる。

この二人は「民芸」を通して、日本人が優等国意識を持ち、朝鮮固有の文化を見下し破壊していた時代であっても、冷静な目と朝鮮民族に対する共感的態度を持ち続けることが出来た人物として、現在でも韓国の人々から高く評価されている。

浅川巧は若くして亡くなったために著作も少ないが、『浅川巧全集』に収録されている「朝鮮の膳」や「朝鮮陶磁名考」、そして彼が書き綴った日記によって、彼自身の朝鮮の民族と文化に対する偏りのない態度・見方を知ることが出来る。

また、柳宗悦は多くの著作を遺しており、『柳宗悦全集』や『柳宗悦選集』が編集されているが、その中でも特に「朝鮮人を想う」、「朝鮮の友に贈る書」、「失われんとする一朝鮮建築のために」の三点は、当時の新聞や雑誌に発表して、朝鮮の民族と文化に対する共感を、多くの人々に訴えた文章として知られている。

こうした文献資料を中心に、具体的な教材を作製することにした。

3 指導上の留意点

このような授業を展開すると、まるで日本の植民地支配を肯定するかのように受け取られかねない誤解を生じる恐れがある。確かに扱い方によっては、浅川巧と柳宗悦を植民地支配の「明るいエピソード」として、免罪符にしてしまえるからである。

そうした矛盾に陥らないためには、浅川巧や柳宗悦の目を通して、当時の植民地政策をしっかりと批判的に捉える必要がある。二人が繰り返し批判しているのは、日本による同化政策である。固有の文化の存在を認めず、それを勝手に劣ったものと決めつけて排除し、日本と同化させようとする。それを日本人の多くは「問題」とすら感じていなかった事実は動かし難い。現在でも一部の人の間には、「植民地支配によって朝鮮を近代化させてやった」という意識が残っており、日本人の驕り高ぶった態度は、過去のものであるとは言い切れない。

そのため授業では、浅川巧と柳宗悦の同化政策批判を中心に取り上げ、また、その前提として、同化政策とはどのようなものであったのか、創氏改名を含めて詳しく

触れることにした。

4 授業展開の実際

授業展開は以下の6時間で構成した。

(1) 朝鮮の土になった日本人—浅川巧の生涯—

ソウルの郊外に建つ、浅川巧の墓の写真をもとにして、韓国の人々によって刻まれた記念碑の言葉を読んでみる。(資料1)

ハングル文字発音・表記表を手がかりに、実際に発音してみると共に、「韓国の山と民芸とを愛して、韓国人の心の中に生きた日本人、ここ韓国の土になる」という文章に込められた、韓国の人々の思いを理解する。

生前の浅川について、追悼文や談話をもとに、その人となりを知る。(資料2)

(2) 「生まれながらの名前で呼び掛ける」—浅川巧の思想—

浅川巧とはどのような人物であったのか、また彼が生きた時代の韓国はどんな状態であったのか、年表をもとに概観を知る。(資料3)

浅川の著作『朝鮮の膳』、『朝鮮陶磁名考』の抜粋を読み、「生まれながらの名前で呼び掛ける」ことを通して朝鮮の工芸品を愛し、またそれを生み出した民族に対する敬愛の念を抱くことが可能であるとする、彼の考えを知る。(資料4)

(3) 浅川巧の日記に見る日本の朝鮮支配

浅川巧が遺した日記をもとにして、植民地支配の実体や関東大震災時の朝鮮人の虐殺を知ると共に、当時の日本人が抱いていた朝鮮の民族と文化に対する優越感と偏見、それに対する浅川の憤りを理解する。(資料5)

その際、王宮内に建てられた朝鮮総督府と朝鮮神社の写真・地図を用いて、日記の記述に見られる情景を想像させ、なぜ朝鮮固有の文化を破壊しなければならなかったのか話し合う。(資料6)

(4) 「内鮮一体」—同化政策とは—

朝鮮総督府が「内鮮一体」を掲げて実施した皇民化政策=同化政策とはどのようなものであったのか、特に創氏改名を取り上げて、その実施理由を検証してまとめる。(図1)(資料7)

その際、朝鮮と日本との家族制度の違いを説明し、創氏改名がいかに朝鮮の人々にとって大問題であったかが理解できるよう注意する。

(5) 「民芸の父」柳宗悦の生涯

東京・駒場にある日本民芸館を紹介しながら、「民芸」という言葉に込められた柳宗悦の思想を知り、その原点となった浅川巧や朝鮮の工芸品との出会いについて、年表をもとに説明する。(資料8)

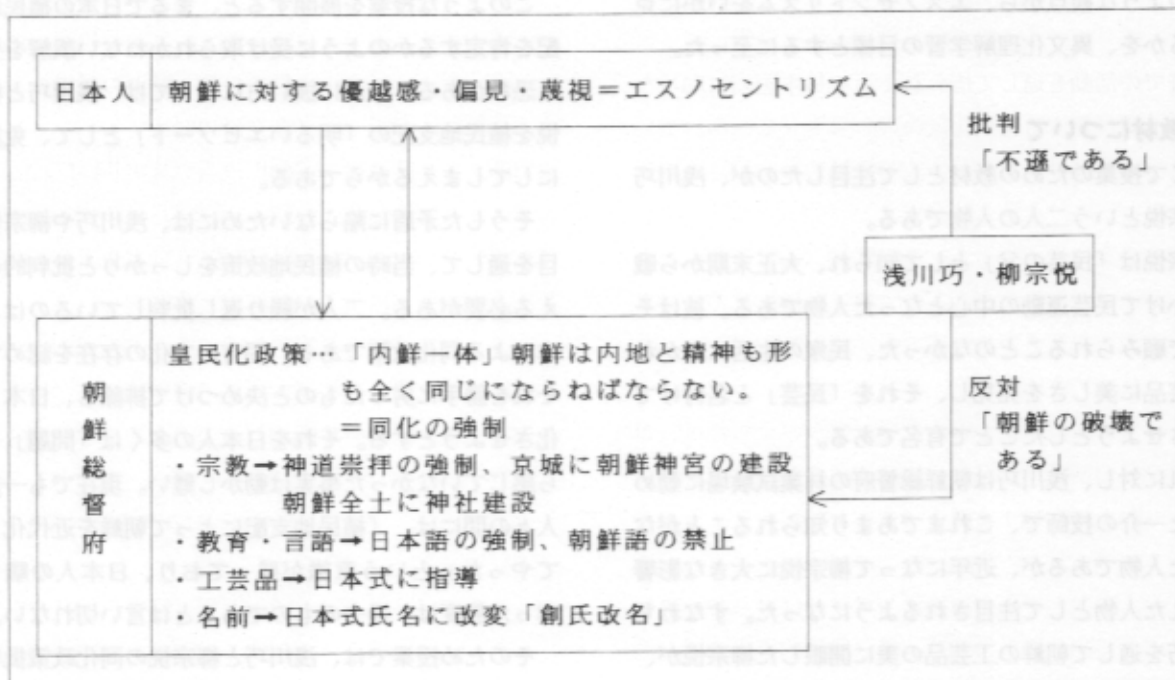


図1 日本人と皇民化政策

(6) 「朝鮮の友に贈る」—柳宗悦の同化主義批判—

柳宗悦が発表した「朝鮮人を想う」、「朝鮮の友に贈る書」、「失われんとする—朝鮮建築のために」の抜粋を読み、同化主義に抵抗し続けた柳の活動を知る。(資料9)

特に柳が、同化を強要する根底に、「征服者の誇り」で「自らを卓越した民だと妄想」する心情があることを指摘している点に注目し、エスノセントリズムについて触れると共に、「個性と個性との相互の尊敬において扱われる」より他に道がないとする柳の考えについて話し合う。

5 おわりに

異文化に対し「偏見を持たずに、ありのままの姿を理解する」と言うのは簡単だが、それを実行することが、いかに困難なものであるかは想像に難くない。まして植民地支配という誤った時代にあっては、容易なことではなかったはずである。それどころか国策として、その正反対の「固有の文化を抹殺して、同化させる」道を押進めていたというのでは、それに抗するのは非常な勇気を必要としたであろう。

ただし、浅川も柳も植民地支配体制そのものに抵抗したわけではなく、政治的には無力に近かったという点で、過大評価はできない。しかしながら、一人の人間の生き方として、二人の朝鮮の文化と民族に対する真摯な態度から学ぶ点が多いと考えて、授業で取り上げた。

また本論では省略したが、授業ではこの後、柳が沖縄を舞台に繰り広げた沖縄方言論争について触れた。これは朝鮮での活動を通して培われた目を日本国内に向けた柳が、沖縄に対する皇民化政策の一貫として行われていた標準語励行運動、すなわち方言撲滅運動が行き過ぎであると批判したことから始まった論争である。

結局この論争は、太平洋戦争の開始によって決着がつかないまま終わったが、柳の発言は戦後になって沖縄の文化復興の気運の中、一定の思想的役割を果たしたと評価されている。

このように、浅川から柳へと受け継がれた視点は、単に朝鮮文化の擁護にとどまらず、文化の多様性を認めようとするものに対する抵抗であったと捉えることが可能ではないだろうか。

異文化との共存を真剣に模索しなければならない現代にあって、浅川や柳の言動は、単に歴史的過去を学ぶ以上の意義があると考えられる。

参考・引用文献

- 高崎宗司編 『浅川巧全集』(草風館1996)
- 高崎宗司 『朝鮮の土になった日本人—浅川巧』(草風館1997)
- 筑波大学大学院教育研究科社会科教育コース編 『海外研修報告書—第3回韓国研修—』(筑波大学教育学系 谷川彰英1998)
- 高根沢均 「植民地期朝鮮の学習における日韓友好の視点の導入—浅川巧にみる異文化理解を中心に」(平成10年度 筑波大学大学院教育研究科修士論文)
- 芸術新潮編集部 「特集 李朝の美を教えた兄弟 浅川伯教と巧」『芸術新潮1997年5月号』(新潮社1997)
- 日本民芸協会編 『朝鮮とその藝術 柳宗悦選集第4巻』(春秋社1978)
- 日本民芸協会編 『沖縄の人文 柳宗悦選集第5巻』(春秋社1978)
- 熊倉功夫 『民芸の発見—季刊論叢 日本文化10』(角川書店1978)
- 鶴見俊輔 『柳宗悦 平凡社ライブラリー—69』(平凡社1994)
- 三重県立美術館編 『柳宗悦展 図録』(三重県立美術館協力会1997)
- 君島和彦・坂井俊樹・鄭在貞 『旅行ガイドにないアジアを歩く 韓国』(梨の木舎1995)
- 小林慶二・福井理文 『観光コースでない韓国一歩いて見る日韓・歴史の現場』(高文研1994)
- 宮田節子・金英達他 『創氏改名』(明石書店1992)
- 藪景三 『朝鮮総督府の歴史』(明石書店1994)
- 芦崎治他 『絵ときガイド 韓国』(日本交通公社1988)
- 親富祖恵子 「柳宗悦の朝鮮観と沖縄観」『国際関係学No.12別冊』(津田塾大学1985)
- 新城俊昭 『高等学校 琉球・沖縄史』(東洋企画1997)

朝鮮の土になつた日本人—浅川巧の生涯—

한국의 산과 민예를 사랑하고

한국인의 마음속에 살다간 일본인

여기 한국의 흙이 되다

ハングル文字発音・表記表

(스)(으)

子音 母音	ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅇ	ㅈ	ㅊ	ㅋ	ㅌ	ㅍ	ㅎ
a	가 ga	나 na	다 da	라 ra	마 ma	바 ba	사 sa	아 a	자 ja	차 ch'a	카 k'a	타 t'a	파 p'a	하 ha
ya	가 ya	나 nya	다 dya	라 rya	마 mya	바 bya	사 sya	야 ya	자 jya	차 ch'ya	카 k'ya	타 t'ya	파 p'ya	하 hya
ə	거 ga	너 na	더 da	러 ra	머 ma	버 ba	서 sa	어 ə	저 ja	처 ch'a	키 k'a	티 t'a	피 p'a	히 ha
yo	거 ya	너 nya	더 dya	러 rya	머 mya	버 bya	서 sya	여 ya	저 jya	처 ch'ya	키 k'yo	티 t'ya	피 p'ya	히 hya
o	고 go	노 no	도 do	로 ro	모 mo	보 bo	소 so	오 o	조 jo	초 ch'o	코 k'o	토 t'o	포 p'o	호 ho
yo	고 ya	노 nya	도 dyo	로 ryo	모 myo	보 byo	소 syo	요 yo	조 jyo	초 ch'yo	코 k'yo	토 t'yo	포 p'yo	호 hyo
u	구 gu	누 nu	두 du	루 ru	무 mu	부 bu	수 su	우 u	주 ju	추 ch'u	쿠 k'u	투 t'u	푸 p'u	후 hu
yu	구 ya	누 nya	두 dyu	루 ryu	무 myu	부 byu	수 syu	유 yu	주 jyu	추 ch'yu	쿠 k'yu	투 t'yu	푸 p'yu	후 hyu
o	그 gu	느 no	드 do	르 ro	므 mo	브 bu	스 su	으 u	즈 ju	츠 ch'u	크 k'u	트 t'u	프 p'u	후 hu
i	기 gi	니 ni	디 di	리 ri	미 mi	비 bi	시 si	이 i	지 ji	치 ch'i	키 k'i	티 t'i	피 p'i	히 hi

發音	ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅅ	ㅇ	ㅈ	ㅊ	ㅋ	ㅌ	ㅍ	ㅎ
發音	k, g	n	t, d	r, l	m	p, b	s	o, ŋ	ch, j	ch'	k'	t'	p'	h
發音	기	니	디	리	미	비	시	이	지	치	키	티	피	히

「人間の価値」

巧さんは、官位にも、學歷にも、權勢にも、富貴にもよることなく、その人間の力だけで堂々と生きぬいていった。：朝鮮のために大なる損失であることはいうまでもないが、私は更に大きくこれに人類の損失だといふに躊躇しない。人類にとって、人間の道を正しく勇敢に踏んだ人の喪失くらい大きい損失はないからである。巧さんは確かに一種の風格を具えた人であった。丈は高くなく、風采もあがらない方で、卒然として接すると、いかにもぶつさらばうで無愛想に見えた。しかし親しんでゆけばゆくほど、その天真の人のよさが感じられ、その無邪気な笑いと巧まぬユーモアとは、求めずして一座を暖かにする力があつた。(中略)

骨董を愛玩する者は多い、しかし真に芸術を愛する者は少ない。けれども芸術を愛するよりも更にむずかしいのは、人間を愛することである。多くの芸術愛好者もしくは愛好者と称する人々は、神経質な、氣まぐれな、人間愛好者もしくは謙遜者であり、わがままなエゴイストである。しかるに：我が巧さんは、実にまた類い稀な、同情の豊かな人であつた。そうしてそれは朝鮮人に対して殊に強く現れたのであつた。

巧さんは人の為にしたことをめつた人には語られなかつた。けれども、巧さんの助力によつて學費を得、独立の生活を営み、相当の地位を得るに至つた朝鮮の人は、一人や二人ではなかつたそうである。巧さんの死を聞いて集まつて来たこれらの人々の、慈父の死に対するような心からの悲しみは、見る人を倒々と動かしたといふわたしもまたその一人を見た。彼は巧さんを本当のお父さんよりも懐かしく思つていたといつた。そういう彼の顔には俺われぬ顔が見えた。巧さんは恐らくその眞つすくなき直覺で、人の氣づかぬ朝鮮人の美点を見出されたのであろう。巧さんの心は朝鮮人の心を掴んでいた。その藝術の心を掴んでいたように。

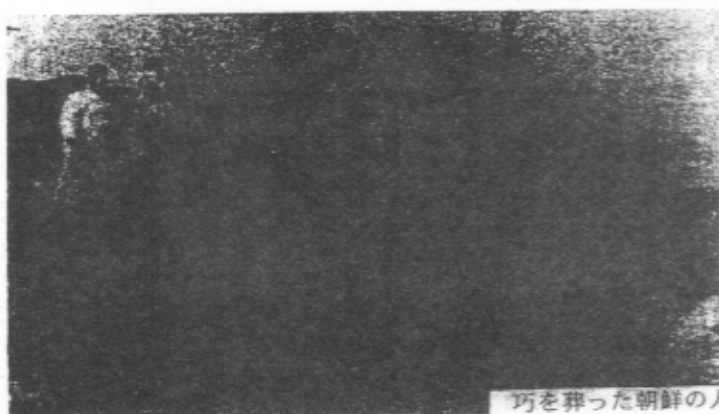
親族・知人が集まつて相談の結果、巧さんの遺骸に白い朝鮮服を着せ、重さ四十貫もあつたという二重の厚い棺に納め、清涼里に近い里門の朝鮮人共同墓地に土葬したことは、この人に対してふさわしい最後の心やりであつた。里門の村人の、平生巧さんに親しんで来た者が三十人も棺を担ぐことを申し出たが、里長はその中から十人を選んだといふ。この人達が朝鮮流に歌を歌いつつ棺を埋めた。

【資料2】 巧さんの生涯は、カントのいつたように、人間の価値が実に人間にあり、それより多くも少なくもないことを実証した。私は心から人間浅川巧の前に頭を下げる。

〔友人で哲學者の安部能成の追悼文〕



浅川 巧



巧を葬った朝鮮の人々

浅川が死んだ。取り返しつかない損失である。あんなに朝鮮の事を内からわかつた人、私には他に知らない。ほんとうに朝鮮を愛し朝鮮人を受した。そうして本当に朝鮮人からも愛されたのである。：彼がいなかつたら朝鮮に対する私の仕事は其の半ばをも成し得なかつたであろう。朝鮮民族美術館は彼の努力に負う所が甚大である。そこに蔵される幾多の品物は彼の収集にかかる。もつと生きていくれたら、立派な仕事で沢山なされたであろう。彼ほど朝鮮の工芸全般に渡つて實際的知識を持つてゐる人はいなかつた。

彼のことを想うと今も胸が迫る。彼はかけがえない人であつた。：彼の様に朝鮮人の心に内から住める人がどこにあらうか。浅川はむしろ朝鮮人の心で生きていたのである。：朝鮮人は日本人を憎んでも浅川を愛した。

〔友人で民芸運動の祖となつた柳宗悦の追悼文〕

浅川氏は韓国語を非常にじょうずに話し、常に韓国語で話した。：韓国人同僚に対する態度に差別はなく、日本人同僚から「あなたは韓国人か」と悪口を言われ、迫害されたほど韓国人を受した。それだけでなく、彼は朝鮮服を好んで着て、夕方にはパチ・デヨグリ(朝鮮の男性用衣服)に木履(朝鮮のはきもの)をはいて帰つた。長いキセルを好み、中国の帽子をかぶり、縄で編んだ背負い袋を背負い、市場に行つて、韓国の骨董品、陶磁器などを買つて、日常的に集めた。そして、そのおかしな様子のために日本人警官から取り調べを受けたこともよくあつたといふ。

浅川氏は、林業試験場の官舎に住み、平素、韓国人に親切で、韓国人たちを受したために、正月や節季のときは、たくさんの韓国人の同僚たちが家に遊びに行つた。自分は机へても困つてゐる人を助け、何人かの韓国人の学生には奨学金を与えていた。

〔元同僚・金二万(キム・イーマン) 韓国林業試験場顧問の談話〕

朝鮮服を着てね、まことに風采はあがらない顔でした。ですから、「ヨボ、ヨボ」と朝鮮人だと思われて、電車の腰をかけていると、「ヨボ、どけ」なんて席をたたされると、黙つてどいて席にかけさせました。

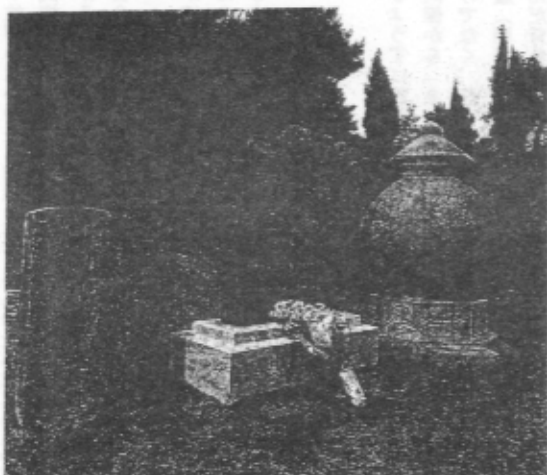
あるときは、青年が学校に行つてたけれど、父が亡くなつたので学校をやめた。なんていう話を聞きますと、そりやかわいそうだといつて、月謝を出してやつて、しまいまで学校に出してやりました。それから、部落の人が初物だといつて、もちしをもつてき、大根をもつてきて、一生懸命庭をはいてくれたり、お風呂をくんでくれたりしたんですよ。そういう人にはおこづかいをあげたんです。月給日になると、もらいにくるんですが、あるときは月給が遅れて、明日おいで、なんていつてるときもありました。

〔師・小宮山栄の談話〕

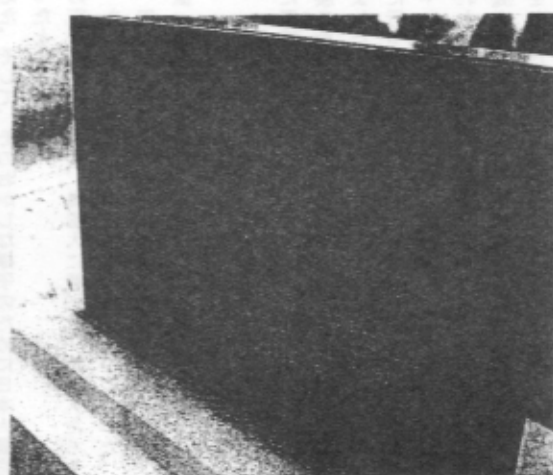
【資料3】

【2017年度】

浅川巧と朝鮮の歴史	
1891 (明治24)年	山梨県高根町に生まれる。
1909 (明治42)年	山形県立農林学校を卒業し、秋田県大館営林署で勤務する。
1910 (明治43)年	日本が朝鮮を併合する。
1914 (大正3)年	兄・伯教(のりたか)を頼って朝鮮に渡り、朝鮮総督府山林課に勤務。兄の影響で、朝鮮美術工芸品の収集・研究に従事する。
1915 (大正4)年	兄を通して柳宗悦(むねよし)と知り合う。
1916 (大正6)年	朝鮮総督府の新庁舎の建設が、王宮内で開始される。
1919 (大正8)年	朝鮮全土に三・一独立運動が広まる。 朝鮮神社の建設が始まる。
1920 (大正9)年	柳宗悦と共に朝鮮民族美術館の設立運動をおこす。
1922 (大正11)年	朝鮮総督府林業試験場(現在の韓国林業試験場)に配属される。柳宗悦、兄と共に窯跡の調査を行なう。 朝鮮総督府の建設のため、王宮正門の光化門が取り壊されそうになる。
1923 (大正12)年	関東大震災がおこり、日本にいた多数の朝鮮人が殺害される。
1924 (大正13)年	朝鮮民族美術館が開館する。
1925 (大正14)年	朝鮮総督府の新庁舎が完成する。 朝鮮神社が完成し、朝鮮神宮と改称される。
1929 (昭和4)年	著書『朝鮮の膳』が出版される。
1931 (昭和6)年	急性肺炎のため死亡。著書『朝鮮陶磁名考』が出版される。
1938 (昭和13)年	官庁・学校での朝鮮語の使用を禁じる。
1940 (昭和15)年	創氏改名が実施される。 すべての朝鮮語による新聞・雑誌を禁じる。
1945 (昭和20)年	日本の敗戦によって、日本による支配から朝鮮が解放される。
1964 (昭和39)年	韓国林業試験場の職員によって、浅川巧の墓が修復される。
1966 (昭和41)年	韓国林業試験場職員一同による「浅川巧功德之碑」が建立。



ソウルの郊外、忘憂堂共同墓地にある浅川巧の墓。朝鮮の器を形どった珍しい墓石が目につく。



巧が勤務した林業試験場の職員の寄金で造られた「浅川巧氏記念碑」の裏面には、墓型と墓標が刻み込まれていた。

【資料4】

正しき工芸品は親切な使用者の手によって次第にその特質の美を發揮するもので、使用者はある意味での仕上工とも言い得る。

工芸品眞偽の鑑別は使われてよくなるか悪くなるかの点で判断すると思う。一家の食物をのせ、団らんの中心ともなる膳の面が月日と共に醜く売けていったり、その脚がゆるんで何時も不安な感じを与えたりしたとしたら、その家庭に及ぼす直接間接の損害は決して少なくないと思う。

しかるに朝鮮の膳は薄美端正の姿をもちながら、よく我らの日常生活に親しく仕え、年と共に雅（みやび）味を増すのだから正しき工芸の代表とも称すべきものである。

これはよく見る光景であるが京城（現在のソウル）から元山に行く汽車の中で、間島方面へ移住する貧しく疲れ切った農夫の一家が、その馴れない長い旅の道中に、邪魔とも思わず客車内に持ち込んでいる荷物のうちには、美しく拭きならされた膳を見うける。住み馴れた家も売り、農事における唯一の力と頼む牛も人手に渡し、親戚知人とも別れて知らない遠い国へ旅立つその家庭にも、使い馴らされた膳は見捨てられないものと見える。また京城でも家移りに運ばれる荷物が通るのを見ていると、満載された膳道具の上に古く美しい膳の添えられていないことはほとんどない。



これに記すところは系統的の研究とか、論議の整然とした考証とかいう種類のものでなく、朝鮮の人達との長い間の交際が生んだ極めて通俗的の叙述にすぎない。しかしそれでも朝鮮の若い人達の間に既に忘れられた事項も少なくないようである。本書に載せた写真を示せば、かくも立派な器物が自国にあつたかと驚く青年すらまれてない。これらのことは、こしばらく過ぎたら更に不明になると思う。本書は見たり聞いたりした事実をできるだけ忠実に記載したつもりである。聞き取りや説明に不備の点もありはせぬかと気にしつつも、書かぬと更に不明になる心配の方を強く感じて書いた。

その日常生活に私を近づけ、見聞の機会を与え、私の問いに親切に答えてくれた朝鮮の友、数えきれないほど多数の方々を一括してここに謝意を表し、なお親しみの一層加えられることを願つてやまぬ。

『朝鮮の膳』

(昭和四年三月出版)

『朝鮮陶磁器の考』

(昭和六年九月出版)

作品に近づいて民族の生活を知り、時代の気分を窺むというような目的にあつては、まず第一に器物本来の正しき名称を知り、それを伝えたいのである。

日本の茶人達が狂喜したほど美しい茶碗も、朝鮮人普段使いの飯碗の中から選択され、名工さえもその前に自らの力の不足を嘆息したほどの優れた茶入れも、源を買せば当時ありふれた美味入れから抜擢されたものであるというような点を、できるだけ判然させておきたいと思う。かく詮索したからというて、名器の価値は増すとも減するような心配はないはずである。それらは生れながらの名前で呼び掛けるならば、喜んで在りし日の昔を語り、一層親しみを感じ得ると思う。またひいてはその主人であつた朝鮮民族の生活や気分にも自ら親しみある理解を持てることは必然である。



疲れた朝鮮よ、他人の真似をするより、持っている大事なものを失わなかつたら、やがて自国のつく日が来るであろう。このことはまた工芸の道ばかりではない。



浅川巧の日記より

大正十一年（一九二二年）六月四日

南山に登った。南山の薬水は美味だった。山頂にはケヤキやエンジュの大木があつて台地になつていた。氷屋も店を出していた。冷やしビールの一本を分けて飲んだ。少し下ると朝鮮神社の工事をしていた。美しい城壁は壊され、壮麗な門は取り除かれて、似つきもしない崇敬を強制する様な神社など巨額の金を費やして建てたりする役人らの腹がわかない。山上から眺めると景福宮内の新築庁舎（朝鮮総督府）など実に馬鹿らしくて腹が立つ。白岳や勤政殿や慶会楼や光化門の間に無理剛情に割り込んで座り込んでいるところはいかにもずうずうしい。しかもそれらの建物の調和を破つていかにも意地悪く見える。白岳の山のある間永久に日本人の恥をさらしている様にも見える。朝鮮神社も永久に日鮮両民族の融和をはかる根本の力を有していないばかりか、これから又問題の的にもなることであろう。

大正十二年（一九二三年）九月十日夜

便りによると「東京の大地震の惨害は実際の災害の十分の一に過ぎない。他は地震のためでなくて不逞鮮人の放火による火災のためであると伝えられ、東京及びその近郊の日本人が激昂して朝鮮人を見たら皆殺しにするという勢いで善良な朝鮮人までが大分殺されつつある由」とある。

自分はどうしても信ずることができない。東京にいる朝鮮人の大多数が窮している日本人とその家とが焼けることを望んだとは。

そんなに朝鮮人が悪い者だと思ひ込んだ日本人も随分根性がよくない。

よくよく呪われた人間だ。自分は彼らの前に朝鮮人の弁護をするために行きたい気が切にする。

一体日本人は朝鮮人を人間扱いしない悪い癖がある。朝鮮人に対する理解が乏しすぎる。朝鮮人といえども彼も皆同じと考えている。白い着物さえつけていたら皆同じ朝鮮人と心得ている。朝鮮人の有識者連中でも朝鮮服をつけて日本人の街を歩いたら恐ろしい侮辱をこうむることがあるという。…僕でさえ朝鮮服の時は時々侮辱をうけていやな思いをするのだから。

このことは些細のことの様だが、おろそかにされないことだ。日頃の憎悪が有事の場合忘れられる人間は少ない。人類とか神とかいう問題のわかる人なら始めから憎悪なんか感じないですむ。平常は人間を対象にしていて憎悪を感じている者でも、時に神とか人類とか大きい問題の前に頭を転じて思いを新たにし得る様ならいいと思う。

大正十二（一九二三）年十月

共進会（朝鮮総督府が朝鮮の産業振興のために開いた工芸品の展覧会）にて

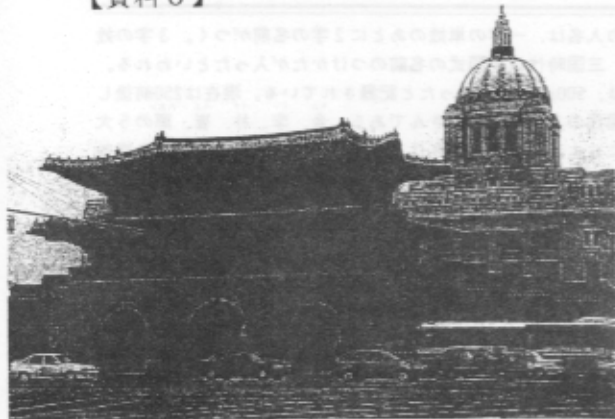
今度の共進会で一般朝鮮人から出品した工芸品はまだなかなかいいものがある。それらがこの会によつて段々影がうすくなるのかと思うと心細い。工芸品でも日本人がいわゆる指導奨励したものにはろくなものはほとんどない。木工品、焼き物、草細工などにはたまらなくいいものがまだ残っている。参考館を見ると日本内地から借りて来た物や各官庁の出品であるが、いづれも馬鹿らしいものばかりだ。参考館はもとよりの模範的出品のつもりであろう。産業を指導せんとする役人らの理想であるに相違あるまい。朝鮮の作品がこの参考品の様になることは朝鮮の破壊である。…朝鮮在来の手法をやめて直ちに日本式の手法を採用することは改良ではなく破壊である。

共進会に二十日余り通つている間に看守の朝鮮少女と仲よしになった。僕の姿を見ると集まつてくる少女らが七、八人あつた。彼女らは大抵十五、六才で二十になつた者はなかつた。…彼女らは二、三人づつ集まつてよく日本人の女看守や守衛に対する不平を話し合つていた。また実際日本人の態度は僕らから見ても腹の立つ様なことが多かつた。日本人の女看守は年増の者が多かつた。そのためか看守仲間でありながら朝鮮少女を時々叱つた。また時に悪く言つて守衛に告げ口したりした。そんな時少女の弁明は多くは無益に終わった。少女らは口惜しがつて同士が集まるとささやき合つた。「ヨボは役に立たない」という定評が通る程になつた。少女同士の話は大体僕にはわかつた。仲よしになつてからは、かえつて向こうから話かけて来た。不用意な日本人の態度に対し憎悪を感じないでいられないことが多かつた。…

ある時などこんなことがあつた。一人の日本人女看守が事務員のところに来て、「私はあんなところを見るのはいやです。並べてあるのは皆ヨボのものばかりです。もつと美しい物の陳列してあるところにやつて下さい。ヨボが来ては売るかとか何ほどだとか話しかけるのですものいやになつてしまいます。…こんな不心得の女が副業共進会の看守人だからたまらない。こんな例は珍しくない。一体看守とか守衛とか巡査とか消防とか、要するに番人であるがその番人が多すぎる。館内に入つて見て感じの悪いつたらない。…女看守などというものは一体観覧者のために便宜をはかり、先約とか簡単な説明とかも心得ているべきは当然であるのに、質問されるからうるさいのそれが朝鮮人だからいやだのなんて言うのはもつての外のことである。こんな奴共だから朝鮮少女をいじめめるのも不思議はない。…僕の目から見たら日本人の威張る理由が不遜でならん。



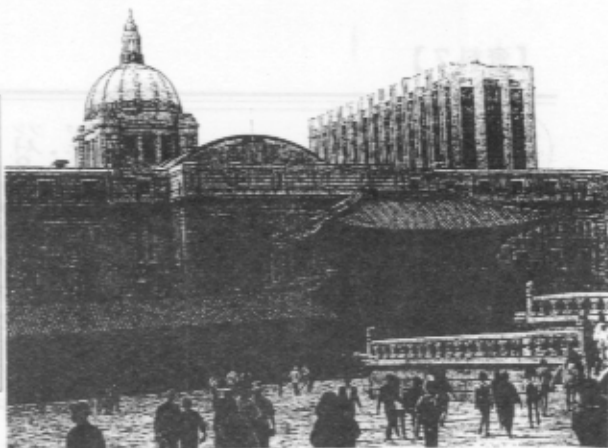
【資料6】



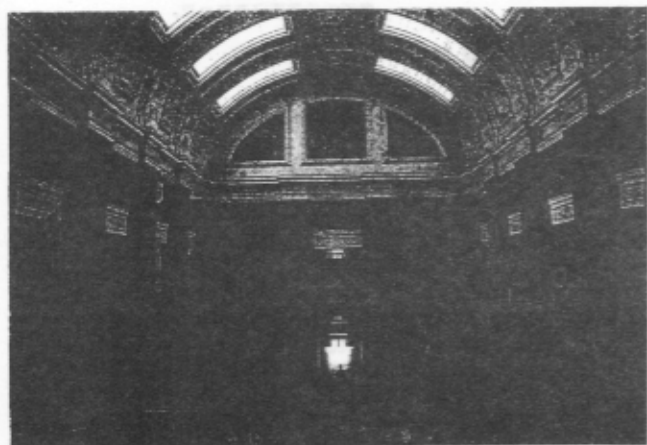
旧総督府の前に建つ光化門。歴史にほんろうされた門でもある。



海防宮配置図



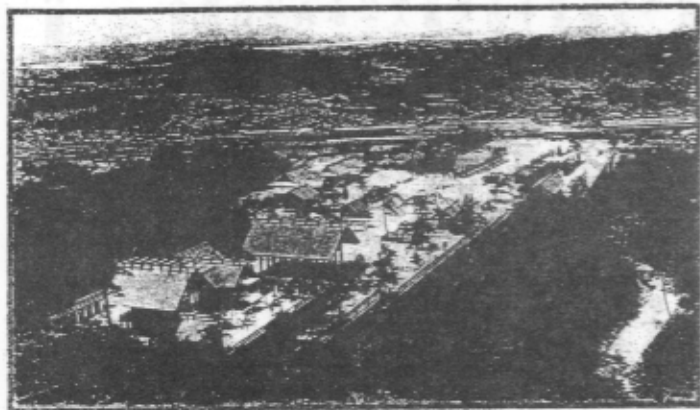
集議院内、勳政殿の内から見た旧総督府。勳政門を往するようにもびえ立つ。



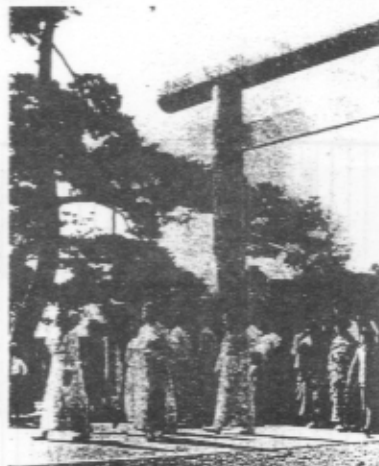
旧総督府正面入口の大広間。全斗煥大統領時代には、よくパーティーが開かれた。



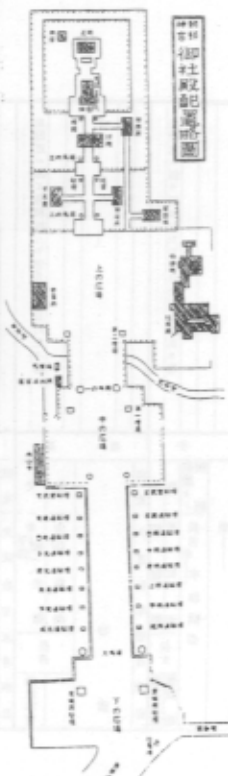
朝鮮総督府と朝鮮神宮



景全宮神鮮朝



朝鮮神宮へ参拝する朝鮮人女性(『日韓併合史』より)



朝鮮神宮配置図



官幣大社朝鮮神宮

覆山につくられた朝鮮神宮ののぼり口(『京城アルバム』より)

家族・姓

가족·성

一家の主として、父親が家長となり、全般的に家族をとりしきる。日本より家族主義で父親の権威は重く、家族関係のタテ・ヨコの結びつきは固い。兄弟のうち長男が重視され、家を継ぐ。娘、次男以下は結婚すると世帯を別に構える。家長を中心に祖父母、父母、長男夫婦の3代の同居が韓国的な家族構成だが、時代の波とともに核家族が増えている。



寸数法 촌수
韓国では、親等を寸(チオン)で表す。父系中心の名称体系。直系では父と子は1寸。祖父と孫は2寸。曾祖父と曾孫は3寸。父系に対する傍系では、自分と兄弟は2寸。伯叔父は3寸。8寸までが親族の内。

内主人 안주인
家長を外主人とすると主婦のことを内主人とよぶ。子供の世話、食事など日常生活の家事の責任を負う。主婦の出身地に宅号をつけて、釜山出身なら、釜山宅(プサンテク)と呼び、実名で呼ぶことを避ける。

【姓】 韓国の人名は、一字の単姓のあとに2字の名前がつく。3字の姓名が基本型。三国時代に中国式の名前のつけかたが入ったといわれる。18世紀末には、500近い姓があったと記録されている。現在は250前後しかない。全国民の2割以上が金さんである。金、李、朴、崔、鄭の5大姓で約60%におよぶ。全国の90%は、35の姓で占められる。二字の複姓も現存するが、南宮、西門、東方などの9つしか残っていない。



姓の禁忌 성의금기
女性は、結婚しても出身の実家の姓を守り通す。日本のように夫の姓に変えない。三世代同居の家族なら、祖田、田、嫁が別々の姓もあり得る。姓を変えるのは先祖や一族のつながりを断つことを意味する。口論の際に、姓を変える/とのしるると最大の侮辱になる。昔、息子を罰する時に、姓を変えて村を退散したが、重罰中の重罰にあたった。



本貫 본관
先祖の発祥地のこと。韓国では、今日に於ても父系の血縁関係の強いきざねによって自分のルーツが存在証明となりうる。本貫と姓が同じ男女は、法律的にも婚姻できない。見ず知らずの者も、同じ本貫とわかると懐かし知己のように振る舞う。

門中 문중
同姓同本のなかに派が生まれ、尊敬される始祖を中心に組織された集団を門中または宗中とよぶ。祖先の墓を同族の氏で祀り、毎年給金を贈く。〇〇門中と呼ばれる。族譜という家系図には、父系子孫の名、生誕日、墓の位置、官職が記されている。

氏制度創設の理由—内鮮一体と氏制度—

朝鮮総督府法務局長 宮本 二元

大和民族と朝鮮民族とは元々同じ系統の民族です。昔内地と朝鮮とは荒海を隔てて交通の便がなかったものですから、朝鮮はとかく万事につけて内地と疎遠がちで、地理的に統一している支那(中国)と交通しておったのです。それで支那の姓を模倣するようになったわけです。

それはそれとして内鮮人は歴史的に論証されているがごとく同祖同根の血縁を有するのですから、精神も形も全く一つに融け合ねばならぬ運命を負うているのです。[今現に本来の]一つの姿に還らんとしております。そのような時期に際して、半島人の一部に法律上内地人式氏を称え得るよう途を拓いてもらいたいという要望が起つて来たのです。つまり通称として内地人式の氏名を称えておったのでは、肝心な場合には名乗れないから、どこへ出ても堂々と内地人式の氏名を称えられるようにしてもらいたいというわけです。そのような要望は最初支那その他の外国および内地に在在している半島人から起つたのですが、それはもつとも至極な要望というべきです。帝国臣民が帝国臣民にふさわしい氏名を名乗りたいというのですから、これを拒否する理由は毛頭ありません。

内地では二、三十年も前から北海道に在在している土人でも、自由に内地人式氏を称え得るようになっております。半島人が内地人式の氏を称え得るようになるがためには、朝鮮には元来氏そのものの制度がないのですから、どうしても氏の制度を定めねばならないのです。

(朝鮮総督府法務局発行「氏制度の解説」昭和十五年二月)

本戸前		本戸		本戸後	
姓	名	姓	名	姓	名
金	大正	金	大正	金	大正
李	大正	李	大正	李	大正
朴	大正	朴	大正	朴	大正
崔	大正	崔	大正	崔	大正
鄭	大正	鄭	大正	鄭	大正

【資料8】

やなぎ ひねよし

「民芸の父」柳 宗悦の生涯



六面取りの秋草手の壺 浅川伯教がもたらしたこの季朝の壺が、柳の朝鮮への関心を加速させた。(日本民芸館蔵)



柳宗悦略年譜

1889 (明治22)年	東京麻布に生まれる。
1910 (明治43)年	東京帝大哲学科入学。武者小路実篤 (むしやのこうじさねあつ) 志賀直哉 (しがなおや) らと共に文学雑誌『白樺』を創刊。以後『白樺』誌上に西洋美術の紹介についての文章を多数掲載。 <u>日本が朝鮮を併合する。</u>
1913 (大正2)年	東京帝大卒業。
1914 (大正3)年	浅川伯教 (のりたか) が朝鮮より来訪し、李朝の壺などを贈る。これをきっかけに、東洋美術への関心が高まる。
1915 (大正4)年	浅川伯教が弟の巧を伴って再び来訪する。
1916 (大正6)年	初めて朝鮮を訪れる。浅川兄弟と再会し、京城 (現ソウル) で浅川巧の家に滞在する。朝鮮の工芸品の持つ美に開眼する。
1919 (大正8)年	<u>朝鮮全土に三・一独立運動が広まる。</u>
1920 (大正9)年	『読売新聞』に「朝鮮人を想う」を連載する。 再び朝鮮を訪ね、朝鮮各地で講演会と妻による音楽会を開く。雑誌『改造』に、「朝鮮の友に贈る書」が甚だしい削除を受けて掲載される。 浅川兄弟と共に「朝鮮民族美術館」の設立運動をおこす。
1921 (大正10)年	東京で「朝鮮民族美術展」開催。この年三回、朝鮮を訪れる。
1922 (大正11)年	「朝鮮民族美術館」の設立準備のために朝鮮訪問。浅川兄弟と共に実地の調査を行なう。 <u>朝鮮総督府の建設のため、王宮正門の光化門が取り壊されそうになる。</u>
1923 (大正12)年	『東亜日報』(朝鮮の新聞)と雑誌『改造』に「失われんとする一朝鮮建築のために」を掲載。光化門は破壊を免れ、移築されることになる。「朝鮮とその芸術」を出版する。 <u>関東大震災がおこり、日本にいた多数の朝鮮人が殺害される。</u>
1924 (大正13)年	朝鮮を訪れ、大震災被災朝鮮人救済音楽会・講演会を開く。
1925 (大正14)年	朝鮮を訪れ、京城に「朝鮮民族美術館」が開館する。
1926 (大正15・昭和元年)	この年、「民芸」の新語を造る。 「日本民芸美術館」の設立運動を起こす。朝鮮を訪れ、「朝鮮民族美術館」で「李朝美術展」を開催。
1927 (昭和2)年	東北・山陰・九州地方で民芸調査を行なう。
1929 (昭和4)年	ヨーロッパ各地の工芸家や美術館を訪れた後、アメリカへ渡り、ハーヴァード大学で一年間講義する。
1931 (昭和6)年	浅川巧危篤の連絡を受け、朝鮮へ。葬儀に参列する。日本各地で民芸調査を開始する。
1936 (昭和11)年	東京・駒場に「日本民芸館」が開館。初代館長となる。
1938 (昭和13)年	初めて沖縄を訪れる。
1939 (昭和14)年	再び沖縄を訪ね、沖縄各地で民芸調査を行なう。年末にもう一度沖縄を訪れる。
1940 (昭和15)年	沖縄滞在中に、「沖縄方言論争」で県庁と対立。「国語問題に関し沖縄県学務部に答うるの書」を主要新聞紙上に掲載。「沖縄人に訴ふるの書」発表。
1941 (昭和16)年	<u>太平洋戦争が始まる。</u>
1945 (昭和20)年	空襲が激しくなり「日本民芸館」を閉鎖。収蔵品を疎開させる。 <u>四月、アメリカ軍沖縄に上陸。八月、敗戦を迎える。</u>
1946 (昭和21)年	占領軍により「日本民芸館」を接収される。
1947 (昭和22)年	接収が解除され、再び再開。「琉球の民芸展」を開催する。
1961 (昭和36)年	脳出血のため昏睡状態となり死亡。

「朝鮮人々を想う」

一九一九年三月一日、ソウルで始まった三・一独立運動は朝鮮全土に広がり、これに對し日本軍と警察は武力による弾圧を加え、約三カ月間にわたって動乱状態になった。当時日本の知識人がほとんど口を閉ざす中、柳は「脱光新聞」紙上に五月二〇日から五日間にわたって朝鮮人を弁護する文章を発表した。またこの文章は後に英訳されて日本の英字新聞に、さらに朝鮮語で朝鮮新聞に掲載された。この発言によって柳は注人物として監視されることになった。



私は今度の出来事について少なからず心を引かされている。特に日本の識者がいかなる態度で、いかなる考えを述べるかを注意深く見守っていた。しかしその結果朝鮮について経験あり知識ある人々の思想がほとんど何らの賢さもなく深みもなく、また温かみもないのを知って、私は朝鮮人のためにしばしば涙ぐんだ。日本は多額の金と軍隊と政治家とをその國に送ったであろうが、いつ心の愛を贈った場合があるろうか。

我々日本人が今朝鮮人の立場にいると仮定してみたい。恐らく養育好きな我々日本人こそ最も多く暴動を企てる仲間であろう。ある道徳家はこの時こそ志士、烈女の理想を果す時だと叫ぶであろう。わがことならぬゆえに、ただそれを暴動だといって罵るのである。私はかかる反抗を賢い道だともまた賛むべき態度だとも思っていない。しかし彼らをただ罵り、しかもそれを拘束する態度を、矛盾に充ちた醜い愚かな狭い心に過ぎぬと思うのである。反抗する彼らよりも一層愚かなのは圧迫する我々である。

私はある日京城で李朝初期の作であろうと思う古い優秀な刺繍を求めた。明らかに明(みん)の作の影響をうけたものであるが、その色彩においても図案においても古朝鮮の美を語るのに十分な作品であった。それを求めた日から間もなく、私は案内されて朝鮮人の高等女学校を參觀した。生徒の製作品をたくさん見たが、ちょうど壁にかけられた大作の刺繍を見た時、私は奇異な感慨に打たれた。それはどこにも朝鮮固有の美を認め得ない現代日本風の作品―すなわち半西洋化された趣味もなく気品もない愚かな図案と浅い色彩との作品であった。しかし先生の説明によれば、それはよく教育された驚くべき手工を示す優等の作品と言われるのである。私は私の所有する古刺繍を想い起して、あやまられた教育の罪を想い、かかる教育を強いられて固有の美を失っていく朝鮮の損失をさびしく思ったのである。

日本の古芸術は朝鮮に恩を受けたのである。法隆寺や奈良の博物館を訪う人はその事実を熟知している。我々が今国宝として海外に誇るものはほとんど支那と朝鮮との恩寵を受けられないものではないであろう。しかるに今日の日本は少なくとも報いるのに固有な朝鮮芸術の破壊を以てしたのである。これがいわゆる同化の道であるなら、それは恐るべき同化である。私は世界芸術に立派な位置を占める朝鮮の名譽を保留するのが、日本の行なうべき正当な人道であると思う。教育は彼らを活かすための教育であって、殺すための教育であってはならぬ。

我々とその隣人との間に永遠の平和を求めようとなれば、我々の心を愛に清め同情に温めるよりほかに道はない。しかし日本は不幸にも刃を加え罵りを与えた。これが果して相互の理解を生み、協力を果し、結合を全くするであろうか。否(いな)、朝鮮の全民が骨身に感じる所は限らない怨恨である。反抗である、憎悪である、分断である。独立が彼らの理想となるのは必然な結果であろう。彼らが日本を愛し得ないこそ自然であって、敬い得るこそ例外である。

「朝鮮の士友に贈る書簡」

一九二〇年、雑誌「改造」六月号に掲載されるが、検閲を受け文章が甚だしく削除された。これも英訳、朝鮮訳された。

不幸にも(日本の)人々はあなた方を盟友として信じる事を忘れていた。彼らはただ征服者の誇りにあなた方を卑しんでいる。もし彼らに豊かな信仰や感情があるなら、必ずやあなた方に敬意を払う事に躊躇しなかつたであろう。多くの外国の宣教師は自らを卓越した民だと妄想している。しかし同じ醜さが、優秀だと信じる我々の態度にもある事を私は感ぜずにはいられない。敬意や謙遜の徳がない所にどうして友情が保たれよう。真の愛が交わされよう。私は日本に対する朝鮮の反感を、きわめて自然な結果にすぎぬと考えている。

日本が自らかもした擾乱(じょうらん)に対しては、日本自らがその責を負わねばならぬ。為政者はあなた方を同化しようとする。しかし不完全な我々にどうしてかかる権威があり得よう。これほど不自然な態度はなく、またこれほど力を欠く主張はない。同化の主張がこの世に(あがな)い得るものは反抗の結果のみであろう。日本のある者が(西洋人による日本の)キリスト教化を笑い去る様に、あなた方も(朝鮮の)日本化を笑い去るにちがいない。朝鮮固有の美や文化の自由は、他のものによって犯されてはならぬ。否、永遠に犯され得るものでないのは自明である。真の一致は同化から来るのではない。個性と個性との相互の尊敬においてのみ結ばれる一があるのみである。

「失われんとする一朝鮮建築のため」

朝鮮總督府が、朝鮮王朝の王宮であった景福宮内に新築されるに伴って、王宮の正門である光化門が破壊されることに憤った柳は、一九二二年、雑誌「改造」九月号にこの公憤状を掲載した。朝鮮訳、英訳もされ、広くこの問題が知られて議論を呼び、結局光化門は破壊を免れて、移築されることになった。

まさに行われようとしている東洋古建築の無益な破壊に対して、私は今胸を絞られる想いを感じている。朝鮮の首府京城に景福宮を訪ねられた事のない方々には、その王宮の正門であるあの壮大な光化門が取り壊されることについて、恐らく何らの神経をも動かす事がないかもしれぬ。しかし私はすべての読者が東洋を愛し芸術を愛する心の所有者である事を信じたい。たとえ朝鮮という事が直接の注意を讀者に促さないとしても、漸次(ぜんじ)に消滅してゆく東洋の古芸術のためにこの一篇を読まれる事を願うのである。これは失われてはならぬ一つの芸術の、目前にその破壊を余儀なくされている事に対する私のさびしい感情の披露である。

しかしなお、この題目が活き活きと読者に形ある姿を想い浮ばす事ができないなら、どうか次の様に想像して頂こう。仮に今朝鮮が勃興(ぼつこう)し栄えることし日本が衰退し、ついに朝鮮に併合せられ、宮城(皇居)が廢墟となり、代ってその位置に巨大(ぼうだい)な洋風な日本總督府の建築が建てられ、あの緑の端を越えてはるかに仰がれた白壁の江戸城が造られるその光景を想像して下さい。

否、もう聲(のこ)の音を聞く日が迫ってきたと強く想像してみして下さい。私はあの江戸を記念すべき日本固有の建築の死を悼(いた)まずにはおられない。それをもう無用なものだと思つて下さるな。實際美においてより優れたものを今日の人は建てることができないではないか。(ああ、私は亡びてゆく國の苦痛についてここに新しく語る必要はないであろう。)必ずや日本のすべての者はこの無謀な処置に憤りを感じにちがいない。しかし同じ事が現に今京城において、強いられている沈黙の中に起ろうとしているのである。光化門よ、光化門よ、お前の命がもう旦夕(たんせき)間近(かんじん)に迫ろうとしている。お前がかつてこの世にいたという記憶が、冷たい忘却の中に葬り去られようとしている。